

## A県における看護師の大学院への進学ニーズに関する調査

著者	若松 美貴代, 高田 久美子, 井上 尚美, 下敷領 須美子, 吉留 厚子
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要=Bulletin of the School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
巻	24
号	1
ページ	7-12
別言語のタイトル	A Study on the Needs of Nurses Entering a Graduate School in A Prefecture
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/23887">http://hdl.handle.net/10232/23887</a>

## A県における看護師の大学院への進学ニーズに関する調査

若松美貴代<sup>1)</sup>, 高田久美子<sup>1)</sup>, 井上 尚美<sup>1)</sup>, 下敷領須美子<sup>1)</sup>, 吉留 厚子<sup>1)</sup>

**要旨** 病院勤務の看護職者へ鹿児島大学大学院保健学研究科の情報を提供し、看護職の大学院への進学についての意識を明らかにし、大学院進学を推進するための基礎資料とすることを目的に調査を行った。

2012年12月に医療機関3施設の看護職220名を対象に質問紙調査を行い、178名の回答があった。本稿では看護師89名について分析した。その結果、本大学院の進学希望は15.7% (14人) で、年代別で比較すると30歳代が22.9% (8人) と最も高かった。進学希望する理由は「学びを深めたい」、「キャリアアップ」、「スキルアップ」が抽出され、進学について「希望しない」の理由は「仕事との両立が難しい」、「育児・家庭の理由」、「進学・卒後への不安」、「経済的理由」、「考えたことがない」、「学びたいことがわからない」が抽出された。「受験資格がない」など大学院への情報不足からくる誤解もあることがわかった。

**キーワード:** 看護師, 大学院進学ニーズ, 生涯教育

### 緒言

少子高齢化の進展、医療技術の躍進などにより医療や看護を取り巻く環境は大きく変化し、国民の健康に関する意識や医療に対するニーズも高まっている。それにとともに、看護職に求められる役割や責任は拡大し、専門職としての生涯教育の充実が求められるようになった。1991年には看護系大学院修士課程5校、博士後期課程2校であったが、2013年にはそれぞれ144校、7校となり看護職の大学院における教育が進められてきた<sup>1)</sup>。

鹿児島大学での看護教育は、鹿児島大学医学部附属看護学校から始まり、鹿児島大学医療技術短期大学部を経て1998年より学部での養成となった。2003年からは大学院修士課程が設置され、より高度な専門知識・技術をもつ専門職者や研究者及び保健医療の活動・充実に貢献できる人材育成をめざし教育が行なわれてきた。

A県には看護系大学院が本校のみで、これまでA県内における大学院進学の調査は見られない。また、本年は本大学院開設10年を迎える節目の年でもあり、助産師教育も大学院で開設する運びとなった。今回は、A県の周産期医療のケアの質を上げるために助産師だけでなく、

当大学院で学ぶ看護師も周産期に関する学びを深めることができるように新生児蘇生法の習得も含めた「周産期医療論」を新設科目として開講する予定とした。その旨を病院勤務の看護職者へ提供し、周産期に関する学びを深められることを踏まえて、看護職の大学院進学へのニーズや意見をまとめ、大学院進学を推進するための基礎資料としたので、ここに報告する。

### 対象と方法

#### 1. 調査期間

2012年12月

#### 2. 対象

A県内で調査協力の同意が得られた医療機関で勤務する看護師・助産師

#### 3. 調査方法

看護師、助産師が勤務するA県内の医療機関3施設の看護部長に調査の趣旨と方法を口頭と文書で説明し、同意を得た後、調査用紙及び解答用紙を入れる封筒を持参

<sup>1)</sup>鹿児島大学医学部保健学科母性・小児看護学講座

連絡先: 若松美貴代

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6792

E-mail: mikiwaka@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

し、看護管理者に配布を依頼した。対象者は看護部門の代表者に選定を依頼しており、看護師と助産師の配布数は不明である。調査には無記名自記式質問紙票を用い、回収の封筒に投函するよう依頼し留め置き法にて調査を実施し、回収は看護教員が行った。

#### 4. 調査内容

調査内容は、対象者の年齢、職種、本大学院への進学希望、進学希望する理由、または進学希望しない理由、本大学院で開講されている科目の科目履修を希望するか(科目履修の希望)、実践力を向上するために必要と思う科目・内容から構成され、これらについて調査を行った。

#### 5. 倫理的配慮

研究対象者には文書に研究目的と方法、調査は無記名で施設名は公表されないこと、調査協力は自由意思であること、調査協力しなくても不利益はないこと、データは調査目的以外に使用しないこと、質問紙の投函をもって同意の確認とすることを記載した。回収はプライバシーに配慮し、各対象者が記入した質問紙を入れる個人用封筒と回収用の大封筒を用意し、回収の投函を持って同意が得られたこととした。

#### 6. 分析方法

対象者属性、鹿児島大学大学院への進学希望の有無、鹿児島大学大学院で開講されている科目のみの履修の希望(科目履修の希望)について記述統計処理を行った。また自由記述の本大学院への進学希望する理由と実践能力向上のために必要な科目・内容については質的記述的に分析を行った。

### 結果

#### 1. 対象者の属性(表1)

配布した3施設において、質問紙の配布数は220名で178名からの回答があり(回収率は80.9%)、看護職の内訳は看護師89名(50%)、助産師89名(50%)であった。助産師においては教育課程が看護師と異なることから、大学院への進学希望についての意見も異なってくると考え、本稿では看護師89名について分析した。

対象者の平均年齢は31.6±6.7歳で、20歳代41人(47.7%)、30歳代35人(40.7%)、40歳以上10人(11.6%)と20歳代が全体の半数近くを占めた。

表1 年齢構成 n=86

20歳代	41(47.7%)
30歳代	35(40.7%)
40歳以上	10(11.6%)

#### 2. 大学院への進学希望(図1)

本大学院への進学希望の有無を5段階に分けたところ、「積極的に希望する」0人(0%)、「少し希望する」14人(15.7%)、「わからない」19人(21.3%)、「あまり希望しない」17人(19.1%)、「希望しない」39人(43.8%)であった。

#### 3. 年代別進学希望(図2)

大学院進学希望の「積極的に希望する」と「少し希望する」を「希望する」群、「わからない」を「わからない」群、進学を希望しない「あまり希望しない」と「希望しない」を「希望しない」群として年代別に分析した。その結果、「希望する」群の20歳代は6人(14.6%)、30歳代は8人(22.9%)と30歳代の進学希望がピークで、40歳以上は0人であった。「わからない」群は20歳代10人(24.4%)、40歳以上2人(20%)の順で続き、30歳代は最も少ない割合で6人(17.1%)であった。「希望しない」群は40歳以上で最も高い割合の80%であった。

#### 4. 進学を希望する理由(表2)

大学院への進学希望する理由については「学びを深めたい」、「キャリアアップ」、「スキルアップ」、「興味あり」、「目標がない」が抽出された。大学院進学について「わからない」と答えた理由としては「仕事との両立が難しい」、「家庭(育児)の理由」、「進学・卒後への不安」、「経済的問題」、「考えたことなし、学びたいこと不明」、

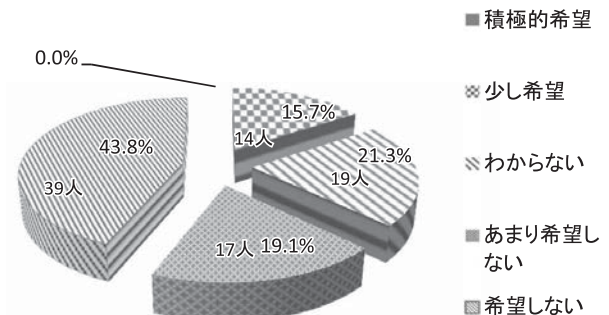


図1 進学希望の有無

表2 進学についての理由

「希望する」理由	「わからない」理由	「希望しない」理由
学びを深めたい	時間なし・仕事との両立困難	時間なし・仕事との両立困難
キャリアアップ	進学・卒後への不安	進学・卒後への不安
スキルアップ	経済的問題	経済的問題
興味あり	家庭(育児)	家庭(育児)
目標がない	考えたことなし・学びたいこと不明	情報不足
	臨床希望	臨床希望
	体力・年齢の問題	体力・年齢の問題
	自信ない	興味なし
	興味なし	

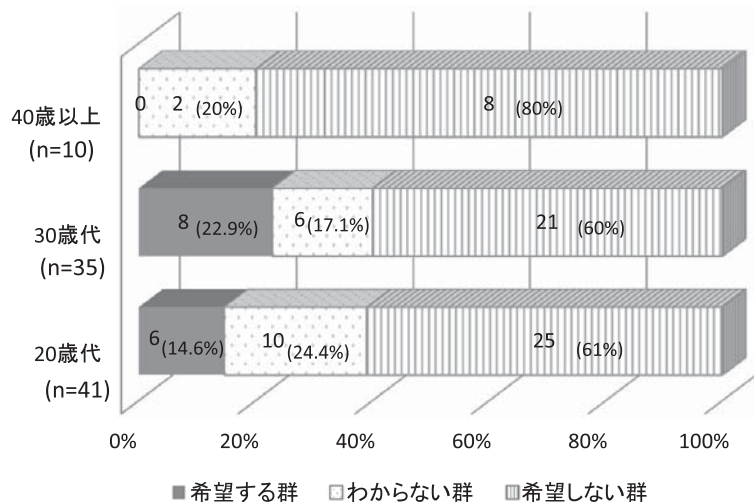


図2 年代別進学希望の有無

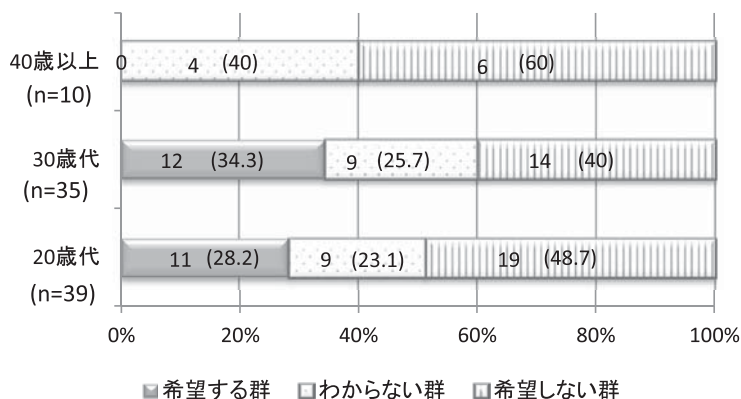


図3 科目履修の希望の有無と年代

「臨床を希望」などが抽出された。「希望しない」と答えた理由は「わからない」と同様の理由であったが、「受験資格がない」など、大学院への情報不足からくる誤解も新たに抽出された。

5. 本大学院で開講されている科目のみの履修の希望について (図3)

本大学院で開講されている科目のみの履修の希望の有無については、「希望する」群は30歳代が最も多く12人(34.3%)、20歳代11人(28.2%)と続き、約3割が履修を希望していた。

6. 実践能力向上のために必要な科目・内容について (表3)

実践能力向上のために、必要と考える科目・内容についての問いで、自由記載は「救急看護」、「がん看護」、「臨床心理学」、「エビデンスに基づいた看護技術」などが上げられた。

表3 実践能力に必要な科目・内容

科目・内容	回答数	科目・内容	回答数
救急看護	4	臨床心理学	4
がん看護	3	看護技術(エビデンスに基づいた)	3
周術期看護	2	実習	3
看護倫理	2	実践能力アップの講義	2
災害看護	1	分娩演習	1
安全管理	1	新生児看護	1
精神看護	1	臨床講義	1
家族看護	1	臨床薬理	1
新生児看護	1	研究・プレゼン力	1
地域医療	1	語学力	1
医学各論	1	リーダーシップ論	1

n=89 回答者28人(複数回答あり)

考察

1. 本大学院修士課程へのニーズ

本大学院修士課程への進学希望は「積極的に希望する」と「少し希望する」を合わせて全体では約16%の進学ニ

ズがあり、また、年代別でも30歳代の「希望する」群が最も高い22.9%であった。先行研究<sup>2)-6)</sup>をレビューすると、A大学病院関連施設に就業する保健師、助産師、看護師、准看護師を対象とした看護学修士課程への入学希望を調査した松下らのデータでは15.0%<sup>2)</sup>、実習施設である病院で勤務する保健師、助産師、看護師を対象としたA大学院への進学ニーズの調査で27.1%<sup>3)</sup>、企業、健康保険組合、労働衛生機関、行政機関など様々な機関で勤務する看護師、保健師などを対象に実施した調査で50.5%<sup>4)</sup>と、対象地域や施設、職種、対象者数などが様々で、一様に比較できない。本調査は其中で進学ニーズが低い値であったが、松下らの調査の対象者に占める看護師の割合が92.2%と高い中で大学院進学希望率(15.0%)や30代の進学希望が21.3%と高かったことが類似した結果であった。

大学院進学を希望する理由については、「積極的に学びを深めたい」、「スキルアップしたい」という希望がある一方で「目標がない」も抽出された。これからは大学院へ進学することでリセットし新たな目標を探したり、今ある現状からの打破のための手段として進学を考えたりしていることが推察された。大学院へ進学し自分の目標を見出し、それを達成することができれば結果としてバーンアウトや離職の抑止にもつながると思われる。

実践能力向上のために必要と思われる科目・内容は様々な分野が挙げられた。中でも救急看護、臨床心理学、がん看護、エビデンスに基づいた看護技術などは、日々の臨床の中で様々な経験を積んできたからこそ見えてきたのではないかと考えられ、幅広い領域の臨床で即、実践に繋げられる内容である。これらの科目については学部の基礎教育のみで完遂させるには困難である。卒後のキャリアパスを見据えた生涯教育としても大学院の役割があるため、今後学部の教育と合わせて検討していく必要がある。

## 2. 本大学院進学を可能にするための支援と課題

本調査での進学について「わからない」、「希望しない」の理由であった「時間なし・仕事との両立困難」、「進学・卒後への不安」、「家庭(育児)の理由」、「経済的問題」は先行研究<sup>5)</sup>の希望しない理由と同様であった。

仕事との両立に加え、年齢によっては家事・育児などが進学しない理由の一つとなっていることが言える。それらとの両立については、進学に対する職場の理解や支援、職場環境の改善など、いわゆるワークライフバランスが推進されることにより仕事との両立が解決されたり、本大学院も他大学院と同様に実施している大学院設置基準第14条の教育方法の特例による昼夜開講制や長期履修制度を利用することで、生活背景に合った大学院での学

び方の選択肢が増えたりすると考えられる。

経済的問題は先行研究<sup>2),4)-6)</sup>でも進学への不安や進学しない理由として挙げられていたことを受け、重要な課題としてとらえるべきである。今回、教育特例法や長期履修制度の認知度については調査していないが、奨学金制度や昼夜開講制や長期履修制度を利用しながら退職しなくても「働きながら学べる」という態勢があることの広報も、周知していく必要がある。

「進学・卒後への不安」、「考えたことなし・学びたいこと不明」からは、ロールモデルを提示し大学院で学ぶことの具体的なイメージを描けるようにすることや、進学や卒後への不安が解消できるような相談窓口が必要と思われた。さらに本大学院が目指す高度専門職業人や研究者、卒後のキャリアパスを明確にすることに加え、体系的な教育プログラムの実践とそのプロセスの透明化が求められていることが示唆された。

鹿児島大学大学院で開講されている科目のみの履修の希望(科目履修の希望)が大学院進学希望に比較してニーズが高かった結果からは、学ぶ意思のある者にとっての科目履修は、大学院進学より比較的ハードルが低く学習意欲を充足させる選択であることが言える。また大学院を身近なこととして知る機会にもなることから、開かれた大学院として多様な学びができるよう今後積極的に検討していく必要がある。

先行研究ではCNSコースや助産師養成コース、認定看護管理者コースを新設した場合の進学希望は33.7%から50.0%へと高くなる<sup>6)</sup>という結果や、CNSコースについては調査対象者の約3割が希望<sup>4)</sup>や進学希望の約6割弱が希望<sup>5)</sup>していることを鑑みると看護師のニーズが資格志望の傾向にあることもうかがえる。今回CNSコースについては調査しなかったが、他地域の傾向からは大学院進学を推進する一つの対策として新たなコース開設も鍵となると考えられた。また、本調査においても大学院への門戸を広げる制度である入学資格審査制度を知らないことによる誤解も依然としてあり、先行研究では3割<sup>5)</sup>というデータもあることから、入学資格審査制度についても、まずは対象となる看護職に伝えていく必要がある。

ワークライフバランスの推進については仕事や生活の充実だけでなく、看護師の進学希望にも影響し、ひいては専門性の向上に繋がることから、早急な整備が望まれる。これらは大学のみでの解決は困難であるため、行政、県内の看護協会とともに職場の理解や体制の整備を促進していくことが必要であろう。

## まとめ

A県の看護師を対象に大学院進学のニーズ調査を行っ

た結果、仕事や家事・育児との両立ができるような職場環境や周囲の理解，ニーズに合った学び方の提示，大学院進学を推進するための具体的な情報提供，卒後のキャリアパスの明確化，体系的な教育プログラムの実践とそのプロセスの透明化が求められていることがわかった。

## 課 題

文科省は2011年の中央教育審議会での答申を踏まえ、2015年までの第2次大学院教育振興施策要綱を策定した。基本的な視点としては国内外の多様な社会への発信と対話，大学院教育の質の保証・向上のための施策を実践することが大学院には求められている<sup>7)</sup>。現在，修士課程が144校<sup>1)</sup>と数多くある中で，今後は本大学院が地域のニーズに応えながらも特色のある大学院として改革し，さらに広く社会へ発信していくことが必要不可欠である。

## 文献

- 1) 石橋みゆき：高等教育における医療者教育の動向と助産師教育．第4回公益社団法人全国助産師教育協議会定時社員総会．名古屋
- 2) 松下年子，岡部恵子，天野政美他：大学病院関連の医療施設に就業する看護師の大学院修士課程入学への関心．日本看護研究学会雑誌 2009；23(4)：39-50
- 3) 江口秀子，吾妻知美：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査 - A大学の実習関連施設に勤務する看護職を対象に - ．甲南女子大学研究紀要第5号 看護学・リハビリテーション学編 2011；3：203-210
- 4) 河野啓子，松本秀明，式守晴子，松岡昌子：看護職の大学院進学ニーズに関する調査．東海大学健康科学部紀要第9号 2003：57-63
- 5) 小澤尚子，坂江千寿子，坂間伊津美他：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査．茨城キリスト教大学看護学部紀要第1号 2009：71-77
- 6) 小松万喜子，平井さよ子，曾田陽子他：愛知県立看護大学の教育改革に関する調査(1) - 本大学院への進学及び修了者雇用に関するニーズの概括 - ．愛知県立看護大学紀要vol.11 2005：69-78
- 7) 文部科学省 第2次大学院教育振興施策要綱，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/08/attach/1309450.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/attach/1309450.htm)，  
2013.3.6

# **A Study on the Needs of Nurses Entering a Graduate School in A Prefecture**

Mikiyo Wakamtsu<sup>1)</sup>, Kumiko Takada<sup>1)</sup>, Naomi Inoue<sup>1)</sup>,  
Sumiko Shimoshikiryou<sup>1)</sup>, Atuko Yosidome<sup>1)</sup>

1) Department of Maternal and Child Health Nursing, School of Health Sciences,  
Faculty of Medicine, Kagoshima University  
8-35-1, Kagoshima City, 890-8544, Japan

## **Abstract**

The aim of this study was to investigate the needs of nurses working at hospitals in A Prefecture, to whom information may be provided about our Department; thereby making it clear how they think about entering graduate school for nursing jobs, the data of which would be basic materials for facilitating advancement into graduate school.

In December, 2012, questionnaires were sent to 220 nurses at 3 different facilities, and consequently we received 178 responses out of which 89 nurses have been chosen for this analysis.

14 nurses (15.7%) expressed their intent to enter a graduate school. By age, those in their 30's showed the highest rate (8, 22.9%).

As for the reasons to enter a graduate school, typical answers were: "want to learn more", "career enhancement", and "upskilling". On the other hand, reasons for not wanting to enter a graduate school included "difficulty in doing both work and study", "issues related to childcare and family", "anxiety about situation after finishing the graduate school", "financial reason", and "no idea or no prospect". Furthermore, we found some misunderstanding in that some respondents even believed that they were not eligible. This is probably due to lack of information.

**Key words:** nurse, needs of entering graduate school, lifelong education